

日本事情での友達へのインタビュー

播磨谷 大輝

目次

1. 出会い
2. インタビュー
3. 結果
4. 授業を終えて

1、出会い

私は高校時代の友人の A 君にインタビューしようと考えています。

私が A 君と初めて話したのは高校二年の時でした。学年が二年に上がった際のクラス替えで周りの環境が一変して、話せる人が少なく困っている時に話しかけてくれたのが A 君でした。A 君は初めて話す私にも明るく話しかけてくれ、とてもうれしかったのを今でも覚えています。それから私は、よく A 君と話しました。休み時間はもちろんのこと、授業中も先生に気づかれないように、くだらない話を授業時間いっぱい話しました。時には無駄話をしているのを先生に見つかって怒られたこともあります。しかし A 君は先生に怒られてもめげる様子もなく、いつものようにニコニコ笑っているような気持の強い人でした。それから彼はいつも彼の持前の明るさとユーモアでクラス中を楽しませてくれました。特に、彼はサッカー部に所属していたので、よくサッカー部の監督のものまねをしてクラスのみんなを楽しい気持ちにしてくれました。しかしここぞという時に、恥ずかしがって面白いことを言えないという面も持っていました。また A 君はサッカー部に所属していたためかとてもリーダーシップがあり、とても頑張り屋さんだったので、特にクラス委員長というわけでもないのに、その明るさとサッカー部で培ったリーダーシップでみんなのことを、よくまとめてくれました。

A 君のことで印象に残っていることはたくさんあるのですが、その中でも特に印象に残っているのは、文化祭でのクラス対抗の合唱コンクールの際にバラバラだったクラスをその明るさとリーダーシップで一つにまとめてくれたことです。コンクールでの結果は残念な結果に終わりましたが、そのおかげでクラス全員が仲良くなり、いろいろなことに結束して取り組んでいけるクラスに変わりました。

私にとって A 君が魅力的であるのは、いつも明るく人よりも優れたユーモアを持ち合わせていて、いつもクラスの笑いの中心にいたからだと思います。また A 君が、どんなつらいことでも嫌なことでも前向きな気持ちで立ち向かっていける人だったからだと思います。そしてその明るさやユーモアさ、一生懸命さというのが私には欠けていて、A 君みたいな人

を楽しませてくれて、どんなことにも前向きに立ち向かっていける人になりたいと、私が心のどこかで望んでいたからだと思います。

質問への答え

女の子にも人気だったのか？A君はそのユーモアさから女の子にも人気がありました。しかしA君は女の子の前になると急にシャイになってしまい、まともに女の子の顔を見て話すこともできないような人でした。また彼から女の子に話しかけるということは、私が見ている限りではありませんでした。

A君が頑張り屋だったというエピソードはなにかありますか？

この話は別の友達から聞いた話なのですが、彼は一年生の時に練習をしていて手の骨を折ったそうなのですが、それでも練習を休むことがなかったそうです。また彼はサッカー部ではレギュラーではなかったそうなのですが、それでも毎日きっちりと練習に参加し、サッカー部の仲間と夜遅くまで自主練をしていたそうです。

2、インタビュー

今回私は、ガストでご飯を食べながらA君にインタビューをしました。これはA君が、改まった感じでインタビューを受けるのは恥ずかしい。インタビューをやるなら、ご飯でも食べながら楽な感じで受けたいと言ったからです。私はそれを聞いて、ユーモアなでみんなの前で馬鹿なこともできて、それでいて恥ずかしがり屋A君らしいと感じました。

私：それじゃあこれからインタビューをしたいと思うけど？

A：俺にインタビューしたって、いいレポートなんか書けないと思うや？
と、A君は恥ずかしそうに言いました。

私：別にいいレポートを書くとかじゃなくて、Aの歴史について知りたいだけだから大丈夫だって。それじゃ一つ目の質問。なんでAはサッカーを始めたの？

私は最初にA君がなぜ何事にも一生懸命なのか。そのルーツを探ろうと思いました。そしてそれは、小学校からずっと続けているというサッカーと何か関係があるのではないかと考えたのでサッカーの話をしながら、それを探ることにしました。

A：サッカーを始めた理由かあ。それは、1988年のサッカー日本代表がワールドカップフランス大会に初出場をした時の試合を見て、俺もサッカーをしたいと思ったからだよ。親にサッカーをしたいと言ったら、「おまえは続かない」って反対されたよ。サッカーを始めた時の俺は太っていたから、キツくて付いていけなかった。

A君はご飯を食べるのも忘れて楽しそうにはなしてくれました。

私：それでAはサッカーを辞めようとは思わなかったわけ？

A：それは不思議と思わなかった。

私：それは親に「お前にサッカーは続かない」って言われたのと何か関係あったりするわけ？

A：んだな！それは大いにあると思うや！

私：A ってもしかして負けず嫌いだったりする？

A：そおだよ。俺って負けず嫌いだよ。

私：そおだったのか。それでそれからの A のサッカー人生を聞かせてくれ。

A：小学校の頃はサッカーの秋田選抜にも選ばれた。サッカーに関しては中学校の時が一番頑張ったかな。ほら！高校の時よく居残りで練習してただろ？それは中学の時から習慣なんだ。俺は自分のサッカーの技術は下手だと思っている。だから居残って人の二倍も三倍も頑張らなきゃだめなんだ。俺って中学二年の時からレギュラーになったんだけど、三年生に下手なプレーをして迷惑をかけちゃいけないって思いもあったから、余計に居残りしなきゃって思ったよ。

そのとき私は、私なら居残りしてまでも頑張ろうだなんて思わないだろう。A 君はなんて意志の強い人間だろうか。と思いました。

私：そおだったのか。A の頑張り屋の背景にはそういう背景があったんだな。

A：そおだな。中学三年の時には、県大会にも出場したんだ。県大会出場のための練習試合で、B 高校と戦うことになって、その時に B 高校の監督に見出されて、推薦で B 高校に入るようになったんだ。

私：そおだったのか。A って挫折とかなく高校まで来たんだな。

A：そんなことないよ。

A 君は少し暗い表情になりました。このとき私はこの意味は知りませんでした。

A：それに高校では挫折ばっかだったしな。高校では大きなライバルが現れたんだ。

私：それって C のこと？

A：そうだ。C は小学のときに、オランダ遠征の代表に選ばれるくらいの優れたサッカーセンスの持ち主だったんだ。俺は負けたくなくて必死に練習をした。もちろん居残りで練習もした。だけど一年の夏の練習中に手首の骨を折ってしまって練習に参加できなくなってしまったんだ。これでは C に追いついていかれると思った。脚は何ともなかったからキックの練習など出来る限りの自主練習はしてなんとか食らいついていこうと思ったよ。

私：そんなことがあったのか。苦労したんだな。俺なら、もう諦めるな。

A：それに高校三年生の五月には練習中に足の靭帯を伸ばしてしまって。結局高校最後の高校総体はレギュラーから外されてしまったんだ。高校総体が終わってからは一時期やる気が出なかった。いっそう選手権予選までサッカーを続けないで引退してしまおうかとも思った。実際引退したやつも何人かいたしもういいんじゃないかって。でも高校に来てから試合にフル出場したことがなかったからフル出場したいって思って部活に留まることにしたんだ。まあ結局その後も試合にフル出場は出来なかったし、部活を続けたおかげでろく

に勉強も出来なかったから、志望校にも合格できなかったしな。

そう言っている A 君の表情は笑顔に満ち溢れていました。後腐れのない A 君の性格が表れていました。

私：A は部活を続けたことに後悔はないの？

A：部活を続けたことに後悔は少しもないし、部活を続けたことでいろいろな経験が出来て良かったと思っている。今でもサッカーをしたいと思っている。これから社会人フットサルチームに入ってサッカーを続けたいと思っている。

私：そうか。さすが A だな。俺が A だったら、きっと後悔してるって答えると思うよ。それじゃ二つ目の質問するな。A はなんでそんなにユーモアなの？

A：俺は自分のことユーモアだなんて一度も思ったことないぞ。

私：ええ！！そおなの！？でもいつも A の周りは楽しい雰囲気だったよ？

A：俺は面白いんじゃないんだ。ただ周りのムードが楽しいのが好きで、ムードが良くなるように気を使ってたってだけなんだよね。

私：そおだったのか。A は小さい頃から楽しいのが好きなのか？

A：それがそうでもないんだよ。小学校のころはあんまり目立たないタイプだったんだ。このとき A 君は少しだけ切なさそうな顔になりました。そんな顔をしたのは、後にも先にもこの時だけでした。そして、それまでよりも話すスピードが、少し遅くなったように感じられました。

私：そおだったの！？それは知らなかった。A は小さい頃からよくしゃべって、楽しい奴なんだと思ってた。

A：それに小学の時はいじめにもあっていたんだ。

私：A っていじめにあっていたのか。

私は嫌なことなら無理して話さなくても良い、と言いました。しかし A 君はすべてを話してくれました。どうせなら、すべてを話したほうが良いレポートが書けるだろうから、と言ってくれました。私ならそんな気前の良いことが言えたかどうかわかりません。きっと嫌なことは話さなかったでしょう。

A：いじめは小学校の二年の頃から始まったんだ。最初はそんなにひどくなかったんだけど次第にエスカレートして行って。一番ひどかったのは小学校三年の時だったな。一番いじめてくる奴と一緒にクラスになって。その時はほんと嫌な毎日だった。だから楽しい雰囲気の中にいたいと強く思うようになったんだ。

私：そおだったのか。じゃあそれから面白い奴に変ったってこと？

A：いいや。結局中学校の時も全然変わらないままだったよ。変わったのは、高校二年の時なんだや。お前らと一緒にクラスになってから、俺はこんな明るい性格になったんだよ。

私：そうだったのか。それはそうと何で最初に俺に話しかけてくれたの？

A：お前は面白そうな奴だったし、席が近いというのもあったかな。とにかくクラスの雰囲気が良かったから、いろいろな人と話したいって思えたんだ。

私：そうだったのか。そういえばさっき A は、ムードが良くなるように気を使ってたって言ってたけど、どうして俺らの間柄で気を使ってたの。

A：それは、もし俺がつまらない奴だと思われたら一人ぼっちにされると思ったからなんだよ。一人ぼっちになるのが怖かったからなんだよ。それに皆が俺をからかって楽しんでるってことがあったけど、もし嫌がったらみんなに嫌われると思った。だからみんなの笑いを取るように気を使ってたんだ。

私：そんな過去があたなんて知らなかった。嫌なことを思い出させてしまってごめん。

A：全然気にしなくてもいいよ。別に昔のことなんて、もう気にしてないし。

A 君は、さっきとは打って変わって、満面の笑みで私に言うてくれました。やっぱり A 君はポジティブな人間なんだな、私なら A 君みたいに、すぐに笑顔になるなんてできないな、と改めて感心させられました。

私は最後にどうして女の子の前では、いつもどうりの A を出せないのか？という質問をしました。

A 君は、それも小学校の頃に女の子に間近で悪口を言われてから、女の子には変に気を使うようになってしまったんだ。女の子に思ったことを言えなくなってしまったんだ。と教えてくれました。

インタビューを終えてから私と A 君は、インタビューには関係ない雑談をしました。さっきまで自分の嫌な過去の話をしていたのに、A 君はそんなことを微塵も感じさせないような笑顔でした。男として懐が深いと感じました。

3、結果

A 君が頑張り屋で負けず嫌いなのは、生まれもったものだというのがわかりました。特に、サッカーを始めることとなった経緯を聞いた時、さすが A 君だと思いました。私ならもしかしたら、そこで挫折していたかもしれません。絶対やめないでやる、という気持ちにはなれなかったでしょう。また今まで A 君のポジティブさは、A 君の生まれもったものだと思っていましたが、しかしそれは間違いで、A 君は様々な辛い事に打ち勝って、そのたびにレベルアップして今のポジティブな A 君になったということがわかりました。A 君にインタビューしていて、よく自分の嫌な過去のことを他人に話せるよなと何度も感じました。そしてよく笑顔でいられるよな、とも思いました。そして私なら絶対そんなことはできないとも感じました。絶対悲しい顔もしてしまうと思います。そういう部分でも A 君は卓越しているんだと感じました。A 君には、辛いことを語らせてしまったと思いますが、しかし A 君のことを、さらに深く知ることが出来て良かったと思います。私にとって A 君が魅力的である本当の理由は、さまざまなことを経験し、私よりもとても、人間性が深い人だったからなのです。今回 A 君にインタビューしてみて、A 君から学ぶことや見習うべきことが多かったように感じます。これからも A 君とは仲良くして様々なことを A 君から学び、また私自身 A 君のように、いろいろなことを経験して学び、私も人間として更に大きくなれ

るように日々努力していきたいと感じました。

4、授業を終えて

日本事情の授業は、他人の魅力を知ることによって自分のことを見直すことが出来て、とても有意義な時間を過ごせたと思います。また、授業を通していろいろな国の人と交流することが出来て、よかったです。同じ年代の人でも、他国の人とこんなに交流を深めることができる経験をした人は、そうないと思います。また今まで面識のなかった人とも、友達になることが出来て良かったです。

人を通して自分を知る

日本事情Ⅱ

李光国

内容

第1章	金さんとの出会い：.....	1
第2章	それからの生活：.....	1
第3章	エピソード：.....	2
第4章	インタビューの動機：.....	2
第5章	インタビュー.....	3
第1節	時間：12月12日 19：00～20：30.....	3
第2節	場所：国際交流会館多目的ルーム.....	3
第6章	インタビューを終えて：.....	5
第7章	授業を受けて.....	6

第1章 金さんとの出会い：

今年10月に金さんに初めて会いました。この前まではずっと同じ学校だったんですけども互いに知らなかったです。初めて見た時は、中国から日本に飛ぶ飛行機ででした。ちょうど彼女は私の後ろに座るようになりました。私は、割合無口のほうで飛行機とか、電車に乗る時隣の座っている人と話し合ったりすることはしません。彼女は飛行機の中で隣の友達ととても楽しく話し合っていました。話が多い人だなというのが初めてのイメージでした。私は話が多い人はあまり好きではなくて正直金さんにはあまりいいイメージではありませんでした。

第2章 それからの生活：

仙台から秋田までの高速バスから降りて、金さんと同じ国際交流会館に住むことになったことがわかりました。初めて始める外国の生活でしたので同じく中国から来た人たちはよく一緒に集まって話し合ったりしました。同じ中国人であってもみんなあまり知り合いではなかったです。でも、みんなにとって誰にでも同じくはじめての外国生活だったのでこ

れから互いに助け合わなければならなかったです。それで、互いの交流が必要でした。幸いなことにみんな友達を作るのが好きなみたいによく集まって餃子を作ったりゲームをやったりしました。

ある日、ゲームが終わってからみんな自分の部屋に帰りました。私と一人の先輩は残ってテレビを見ました。金さんも帰ったと思ったら一緒にテレビみるといつか戻ってきました。それで、先輩と、金さんと私三人が残って話し合い始めました。私はいつも聞く方ですのおもに金さんと先輩が話していました。それぞれの中国にいるときの話、大学入ってからの話などをいろいろ話しました。話しているうちに金さんは意外と勉強家だということがわかりました。大学に入ってから毎朝5時に起きて図書館に行って勉強します。2時間ぐらい勉強してから朝ごはんを食べて一日の授業を始めます。そして、夜は10時まで自習します。でも、遊ぶのも怠らないのです、友達が遊びに誘ったらきっと乗ってくれます。そして、女たちが好きがっているショッピングも毎週欠かさない、いつも元気で笑ってくれて友達もたくさんいるみたいでした。

私は勉強もちゃんとして、ユーモアで人とよく付き合える人が魅力的だと思います。金さんはちょうどそんな人だと思います。短い日々でしたがいつも元気に笑っていて外国でのひとり生活でも落ち込んでいたことは一度もしなかったのです。一緒にいるときはいつも笑い話をしたりふざけたりして楽しい雰囲気してくれます。

金さんはぱっと見たら子供のように幼稚に見えますが、実は自分なりのしっかりした考えと目標がある人だと思います。

第3章 エピソード：

私はクリスチャンです。母親がクリスチャンで小さい時から母と一緒に教会に行きました。偏見かも知れませんが、私は、クリスチャンに特別親しみを感ずります。秋田に来る前に日本に教会があるかなと心配していましたがうれしいことにありました。教会に通っている留学生の先輩に聞いたら毎週日曜日に日本人のおじさんが教会まで連れていってくれると言いました。日曜日になってあのおじさんが来ているのを待っているとき金さんも来て自分も行くと言いました。私は吃驚して金さんもキリスト教信じているのと聞いたら信じてからもう十何年もあるよと話しました。待っている間に、中国にいるときの教会であった楽しいことをいっぱい話してくれました。私は本当にびっくりしました。先日の話を通して金さんについての印象がちょっと変わったといえは今はすっかりよくなりました。今はバイトのために行けなくなりましたが同じものを信じている人が近くにいると思ったら本当にうれしいです。

第4章 インタビューの動機：

初めて会ってから今まで金さんは私を何回もびっくりさせました。まずは、初めて金さんを見たときあまり勉強しないでおしゃべりばかり考えているのだと思いましたが、その日の話を通して金さんはなかなか勉強家だということにびっくりしました。それからは、金さんは自分なりのしっかりした考えと夢があったということです。まさにこのように何回も

びっくりさせて金さんのことをもっと知りたくなるようになったのではないかと今では思います。

まだ口では話したことはないのですが、金さんは人が落ち込んでいるときいつも元気にしてくれる存在だと思います。笑うことだけではなく、話すのも、ふざけをいうのも子どものように悩みとかはちっともないように元気です。勉強にも励んでいていつもいい成績だったそうです。中国では成績がいい学生さんに毎年奨学金をくれます。そのわずかな学生の中に金さんは必ずいたそうです。

これまでの接触を通して金さんについてちょっと知るようになりましたがまだ金さんの多くの面が知っていないと思います。いつも元気で笑える秘訣は何か、他の物を考えなくて一心に勉強ができる方法は何か などなどいろんなことがもっと知りたいです。金さんは別の人より元気そうに見えるのにはきっとそれなりの理由があると思います。それを知って自分にもプラスにしていきたいこともあります。

第5章 インタビュー

第1節 時間：12月12日 19:00~20:30

第2節 場所：国際交流会館多目的ルーム

インタビューと言って不自然になることはないかと思って私は普通に話し合う感じでインタビューをしました。

内容：

約束の時間になったら金さんはいつものように笑いながら入ってきました。

1. 毎日笑え！

金：どうした、何のことで私を呼んだ？

私：別に やることがなくて君と話したくなった。

金：なんだ、そうか

私：ねえ、僕、前から聞きたかったけど何で君は毎日元気に笑えるんだ？

金：(早速) 何で、毎日落ち込んでいる必要があるんだ？

意外と聞き返されて何を言えばいいかわからなくなりました。話をどう進めばいいか迷っているとき金さんは笑いながら言いました。

金：私は笑うというのは本当にいいものだとおもう。気持ちがいい時笑ったらもっと良くなる、あまり良くない時や、悲しい時にも笑ったらよくなるんじゃない。

私：悲しい時は笑うはずがないだろう

金：実は笑わなければならないのよ。

私：え！！

金：よく考えてみて、たとえば悲しい時。悲しいことばかり考えればいるほど悲しくなるの、私は多くの場合人たちは、悲しさを自分で作りだすのだとおもう。実際はそこまで悲しまなくて済むこともそればかり考えればもっと悲しくなるの。実は私も悲しい時がある

の。でも、私は実際の悲しみだけ悲しんで、それより多くの悲しみを作りたくない。

私：でも、金さんはいつも笑っているんじゃない

金：人は誰でも楽しい毎日を過ごそうとしているの、自分の悩みで他人にも影響を与えたら徹格的に言えばそれは人権を侵すのだと私は思う。

私：そんなことないだろう

金：(笑) それはちょっとおおげさ。でも、考えてみても李さんの友達がいつも暗い顔でいたら李さんはよくなるはずがないだろう。私は自分のせいで他人が気持ち悪くなるのはいやなの、それに他人の前で暗い顔をするようなことでもないし。

私：それもそうだけど

金：この答えで ok?

笑えば楽しくなる、楽しければ笑うようになる、生活の中にはいろんな楽しさがあり、問題はそれに気づけるかどうかのことです。これらは考えれば実は簡単ですが今までそれに気づいていないでした。それに対して金さんはこの簡単でありながらごく重要な生活の哲学をちゃんと知っていました。

2. 自分に責任持て！

私：うん、一応。それから別の話なんだけどふつうは遊ぶのが好きな人は勉強の方が弱くて、勉強の好きな人はあまり人と付き合うのが下手なんだけど、何で金さんは両方ともできる？

金：(笑) 私高校の時までの勉強は親と先生がいつも厳しく言っているから仕方なくやったのだけど大学に入ってから自分の未来をしっかりと考える年になっている。だから学校も先生も勉強を全部学生自身に任せるんじゃない。今のうち自分の夢をたててそれを実現する準備をしなければならないと思う。李さんもよく考えてみて、大学 4 年間長いといえはながいし、短いといえは短い。大学時代だけが自分で自分の目標を決め、それに合ったものを勉強できる時期だよ。自分の未来に責任をとれるのは両親でも、一番親しい友達でもない自分自身なの。

私：何で金さんはそんな風に考えるのができる？

金：それはやっぱり天才からなんじゃない？ (笑) 実は、私もわからない、でも間違っていないと思っている。

勉強のために勉強してきた私に金さんの話は大きな響きでした。

3. 自分を許せ！

私：金さんは、誰にも持てるみたいだけど、どうやって人間関係がうまくできる？人と付き合うのに何かコツがない？

金：さあ、何だろうね 私一度も考えたことないんだけど。(ちょっと考える) 自分より他人のこと先に考えることだと思う。苦しんでいる人を見ながら自分だけ幸せになる自信はないから他人が苦しんでいるのを見るのがいやなの。だから、まず他人のことを考える。

コツといえばやっぱり常に立場を変えて考えるのではないかな

私：では、金さんのことを認めてくれない、あるいは嫌がっている人がいたらどうする？

金：全然気にしないとは言えないけど、そんなにも気にする必要はないと思う。私は私、人は誰でも欠点があるはず、それを許しあって過ごすのは大切。人に欠点があってその人のこと嫌がる人はその人自身の問題、そんな人には本当の友達が作れない。よく考えてもし自分に済まない事やらなかったらそれでいい。まずは自分のことを許す。

私：自分のことを許す？

金：そう、まずは自分が自分のことを許さなければならない。ちょっと偏見かもしれないけど私は苦しんでいる人はみんな自分が自分のことを許してくれないのだと思う。誰もせめていないのに苦しむのは自分がいつも自分を責めているだからだとおもう。それがほんとの馬鹿。で、自分のことをよく検討してもしそんなに自分に済まない事やったことなかったら私のこといくら嫌がっても平気、私が自分のこと許してくれるから。

私：それで金さんは毎日楽しいんだ

金：うん、そうかもね (笑)

自分を許す、そこには金さんの生活に対してのオリジナルな知識が潜んでいたと思いました。

私：金さん、実は授業でインタビューする宿題があったけれど、私は金さんをインタビューすることにしたので、それで今話したのをインタビューの内容にしてもいい？

金：いいよ、みんなが李さんの宿題見たら私有名になるんじゃない (笑)

第6章 インタビューを終えて：

金さんと話しているうちにいつも間にか一時間半も過ぎてしまいました。金さんと話しているのは楽しいか何だかこの一時間半はとても短く感じました。私に質問は金さんにとって普通に考えていない問題らしく、しばらく考えてから答えてくれる場合が多かったです。でも、どんな質問でも真剣に考えてくれました。元気いっぱい話ながら何度も私を笑わせてほんとうに楽しいインタビューでした。

笑うという簡単な生活の知恵、自分に責任を持って頑張る、生きながら偶には間違いをしてもまず自分を許す勇氣。私が魅力的だと思う金さんはこれらを全部身につけていました。私も金さんのように楽しい毎日を過ごす魅力的な人になりたいと思うようになりました。

このインタビューを通して金さんのこともっと知るようになりました。ボイスレコーダを持っていなかったので録音はできなかったです。手書きでメモを一応とりましたが取れな

かった内容がいくつかありました。今度のインタビューは私にとって生活しているうちの知恵へいろいろ考えさせる人生の勉強にもなりました。本当に生活には多くの知恵と学問があると思うようになりました。同じ国、同じ環境の中でも楽しく過ごしている人がいると
いえば苦しく過ごしている人もいます。人生とはもしかして生活を勉強していく過程かも知れません。人は自分たちの生活をどう理解し、どう受け取ればいいのかこれからの長い日々を通して勉強するのでしょうか。自分の人生を素晴らしく生きている人達の考え方を知ることによって毎日の生活が苦しいと思う人たちは自分の人生を変えられるかも知れません。私は、金さんは生活の知恵に富んでいる人だと思います。これからも金さんにもっと多くのことを聞いてその知恵を私の生活にも活かしていきたいと思います。

第7章 授業を受けて

何年間もの日本語授業をうけてきましたが初めて日本人の学生さんと一緒に受ける授業でした。この授業を通して日本人学生と一緒に何かの話題で話し合ったし普通の日本人の生活の中で日本人はどんな言い方で話をするのかをわかることができました。

文化の違いで難しいと思ったこともあったのですが互いの文化の違いを理解して、摩擦がないように接するのが重要だということが分かるようになりました。これからもいろいろな外国人と付き合うようになるとと思いますが接し方をもっと勉強しつつうまくやっていきたいと思っています。

友の魅力

G8

岩佐 直樹

- 目次
1. 出会い
 2. 大久保
 3. インタビューの動機
 4. インタビュー
 5. まとめ
 6. コメント

インタビュー相手：大久保

1. 出会い

彼と出会ったのは、高校に入学して2週間ほど過ぎ、すこしだが高校生活に慣れてきたころだった。友達に誘われて卓球部の見学に行った時のことだ。そこには私より先に見学に来ていてすでに練習に参加している数人の一年生がいた。そしてその中にいたのが今回インタビューの対象の大久保だ。私は彼を見たのは初めてではなかった。以前、県外での卓球の大会で同じ旅館に宿泊していたのだ。『名前は知らないが、確かまあまあ強いやつ』くらいしかイメージがなかった。彼は先輩たちに「少年」と呼ばれていた（ほぼ見た目のままだ）。このあだ名はまあまあ定着していった。

私も卓球部に入部し、彼と話をした時にあの旅館に泊まった時のことを話してみたところ、彼もそのことを覚えていた。それが特になんの面白みのない現在にも続く大久保との出会いだった。

2. 大久保

彼は1年生ではあったが、団体メンバーに入り、県大会までコマを進めるほどの実力を持っていた。

私たちの絆がもっとも強くなったのは、先輩方が引退し、私が部長、彼が副部長になった

ときからだったと思う。お互いにぶつかり合いながらも部活を盛り上げるために協力してきた。そして彼は負けず嫌いで、彼とは色々と張り合った・・・意味もなく勉強時間を競い勉強はなんだかんだで同じくらい、ボーリングは惨敗、カラオケは圧勝、長距離走は1秒差で負け、そして何より卓球は私が勝つことはなかった。彼は勝負ごとになると無駄に自信を持っていた。何を根拠にそんなに自信を持っていたのかはなぞだが。

彼は人と仲良くなるのが得意だった気がする。知り合いのまったくいない塾に通い始めてもあっという間に溶け込んでしまっていたみたいだった。これは彼の誰にでも優しく接する人の良さからきているのか彼は後輩によく慕われている。それもなぜか他校の後輩が多かったのだが、よくわからないことだった。今でも塾講師のアルバイトをしているようなのだが、生徒の女の子に気に入られているということなどをたまに連絡してくる。彼は面倒見もいいですから年下から慕われるみたいだ。高校の時も高校受験の迫った後輩にその子の家まで行って勉強を教えていたこともあったりした。

そんな彼でも K 君という友達とはよく喧嘩することがあった。「あいつとは絶交だ」このセリフを何回聞いたかわからなくなるくらい聞いたと思う。3か月に一度はこんなことがあったので、私たちとしては「またか」と思うくらいで、結局1か月くらいなんやかんやあったのか、なかったのかはわからないが、絶交は終わっているというのがいつもの流れだった。彼はきっと友達を本気で嫌いになれないのだと思う。

そして、私をもっとも印象に残っているのは大学受験の時のことだ。センター試験が終了し、その時点で彼と私の点数はほぼ同じだったが、私は A 判定の出ている秋田大学へ、彼は予備校の判定では D やら E といった判定の彼の第一志望だった大学を受験することにいた。E 判定でも来年の練習のためにといった理由で受験する人はいたが、彼は少しも落ちる気がなかった。そして見事奇跡的にも合格した。先生方も大変喜んでいたので印象的だった。

3. インタビューの動機

今回インタビュー相手に彼を選んだのは頼みやすかったからなのだが、高校時代、もっとも多く同じ時間を過ごした一応親友だったが、あのころは近くにい過ぎて彼のいろいろな魅力を意識することがなかった気がする。私は彼についてまだ何も知らないのかもしれない。今度のインタビューで彼にはいろいろ聞いてみたと思っている。

4. インタビュー

日時 2009年1月5日 午前11時から

場所 高校の時よく行ったある飲食店

その日は高校の部活に顔を出しに行くついでにインタビューをするという予定で今回のインタビュー相手の大久保と同級生と二つ下の後輩の三人で集まった。
私が着いた時すでに全員が揃っていた。

大久保：遅かったな？

(久しぶりに会ったが高校のころからあまり服装は変わらずお洒落な方ではない)

私：いや！お前らが早いだけだから。

(とりあえず食事をしながら雑談。)

大久保：そういえばインタビューって何よ？

(ちょっと興味があるみたいだ)

私：そういう授業があんだよ。(特に説明なしにインタビュー開始)

大久保：そこ説明ないのかよ！？

私：ないけど。早速だけどインタビューいきます。君は K 君とよく喧嘩をしては、「あいつとは絶交だ。今回はマジだから！」と言って2、3か月後には元に戻っているというのが高校三年間で何度もありましたがあれはなんだったのですか？

大久保：あっ！あれ！あれは K がしつこくメールとか電話してくるからしかたなく対応してるうちにそうなるだけだよ。

私：お前の怒りってそんなもんなのかよ。

大久保：そうじゃないけど。よくわかんない。とりあえず友達だし。笑

(雑談の後、神社でおみくじを引いたら母校に向かうことになった)

神社に向かう途中

私：お前って他校の後輩に無駄に慕われるのってなんなの？

大久保：例えば？

私：K 高校の O (卓球部の男子) とか S 高校の A (卓球部の女子*私の中学のときの後輩だがなぜか私にはため口。二つ上なのに?) とかさ。O は「今度野球しましょうよ？」だったり、A は「大久保さん、勉強教えてください」とかあるでしょ。

大久保：O はメールしているうちに仲良くなって、A は姉 (同級生) と友達だから自然に話したりするようになったしな。なんで慕われるのかはわんないな。特に意識してるわけでもないし。

(とりあえず母校の体育館に入り部活に参加。私たちがいたころとは違って活気がなく部員全員が集まってない状況だった)

大久保：なんかやっぱり変わったな。(ちょっと寂しげな感じになっていた)

私：完全共学になって学校全体の空気も変わったみたいだしね。

大久保：違うとこみたいだ。

そのあと、後輩たちのだらだらした特に目的のない練習に苛立ちもあったのか、彼の後輩の指導も厳しいものになっていった。(卓球をすでに辞めていた私まで巻き込まれたが)だが後輩たちも悲鳴を上げながらもなんだかんだで彼の扱きにも耐え、彼は彼で昔からそうだがただ単に扱っているだけではなく、しっかり技術の指導も細かく出していた。こういう姿を見ていて今まで彼が私のインタビューに対して「わかんない」と言ってきたことが、なんとなくわかった気がした。彼がいつだって真剣に卓球に打ち込んでいる姿は怖くもあるが美しく、堂々としていて、こんなにも強く頼もしい存在なのかと思った。こんな彼の姿に魅かれたものたちが彼の周りに集まるのだらうと思った。だが大半のものは彼のそんなことには気づいていないだらう。それは誰もそれについて口には出さないし、彼のキャラにも似つかないものであるからだ。

(部活が終わり、最初に集まった4人で本屋へ向かった)

私：なんでお前ってそんなに何をするにしても自信満々なの？

大久保：だってお前それはあれだよ。できると思って行動に移さないとできるものもできなくなっちゃうじゃん！照れてる様子だった

私：俺にはそう思えるのが羨ましいけどな。笑

大久保：だからお前は俺を越えられないんだよ。笑

私：劣ってると思ったことなんて一度もないね。

(だが実際、負けている気がした)

その後みんなで焼肉にでも行こうとなっていたが、彼は予定があるようだったので、解放してあげた。

5. まとめ ～私と大久保～

今回、大学の講義の講義内容ということで大久保という人をまた新鮮な目で見ることができた。インタビューで彼はインタビューで多くは語ろうとはしなかった。あまり高校のこ

ろから自分のことについて話すような人ではなかったし、今回もそうだった。それにインタビューの答えは「わかんない」というようなものが多かった。人に好かれるというのは確かに理由は本人でもわからないものだろう。

彼のポイントはやはり積極性だと思う。そしてそれこそ私と彼の一番の違いだと思っている。彼は何事にも積極的に行動するタイプで、方や私どうしても先のことを考えて行動するタイプだ。そのおかげで部長、副部長として、友人としても、お互いにバランスを取って後輩との意見の食い違った時や日々の練習を乗り越えて来れたのではないかと最近思うことがある。

そして、何より私が彼のその積極性こそが私の彼に対する憧れの源のようなものとそういう気がしてならない。人間関係でもだが、スポーツや勉強などにもそれは表れていた。私は今回のインタビューで彼について初めて真面目に考えることになって私の彼に対する憧れがあったことに気づき、その正体も知ることができた気がした。

6. コメント

この授業は今まで何年も付き合ってきた友にインタビューするという内容で、今更やらなくても良いのではないかと始めは何か意味のあるとこなのだろうかと思っていたが、改めて友達について考えるということは、なんだか新鮮で面白く思った。

また、知らない人とも話すことができ、留学生との交流は違う文化に触れることは貴重な体験だった。

日本事情Ⅱ

G8 岩崎史始

・内容

1. 出会い
2. 人物像
3. インタビューの動機
4. インタビュー
5. まとめ
6. 授業を終えて

1. 出会い

山田さんとの出会いは入学してから2週間くらいたった頃でした。まだ、入学して間もなくだったため友達も少なく、1人であることの多かった私に話しかけてくれたのが山田さんでした。その頃の山田さんはすでに同じ学科の人と打ち解けあっていました。後に知ったことなのですが、山田さんは入学前のオリエンテーションに出ていたため、すでに仲良くなっていたとのことでした。しかし、参加していない私にも仲良くしてくれたやはり、山田さんの人がらがあつてのことだと思います。しかし、当時はそのような事情も知らなかったの、私はそんな山田さんを羨ましく思っていました。その反面、話しかけてくれた時はとてもうれしかったことを今でも覚えています。それからは学校以外でも遊ぶようになり、今でもずっと仲良くしています。

2. 人物像

山田さんの一番の魅力は何とんでも彼の人柄だと思います。山田さんの周りには人が自然と集まってきます。それは、山田さんが周りの雰囲気をも明るくしてくれるからだだと思います。山田さんを見ていて気付いたことなのですが、山田さんは意外とシャイで初めて話す女の子だと、口数が減ってしまいます。しかし、比較的早い段階で打ち解け

られてしまうので、彼がシャイだということはあまり知られていないのかもしれませんが。

また、他の魅力として、頭がよいところだと思います。みんながわからないような問題でも山田さんなら理解していることがほとんどです。しかし、その理解しているのも彼の努力のたまものだと思います。彼の部屋には参考書がたくさんあり、毎日のように勉強をしている様子があります。毎日の努力の結果があるからこそ彼は頭がいいのではないだろうかと思います。ただ勉強が出来るというだけでなく、頭のキレもよくどんな状況にあってもその場に適した最適な選択をして、みんなを導いていってくれます。また、知識も豊富で、政治経済の話から芸能・スポーツ関係の話までどんな話も知っているため説得力もあるのだと思います。

しかし、山田さんは自分の過去はあまり人に言わない傾向にあります。質問したら答えてくれるのですが、あまり多くは語らないためミステリアスな部分も持っています。山田さんはいろんな人から相談や悩みを打ち明けられているのですが、それに対しても、時には厳しくもやさしく相談にのっているため、いろいろな経験をしているのではないのかと私は思っています。

3. インタビューの動機

山田さんは自分のことを進んで話すということが少ないため、今回のインタビューで少しでも多く知ることが出来たらいいなと思っています。また、彼は素晴らしい点をたくさん持っています。そういった点だけでなく、もっと違う点でも知ることができたらいいと思ったため、インタビューをしようと思いました。

4. インタビュー

私：さっそく、インタビューしていくけどいいかい？

彼：別にいいけど、俺についてインタビューしてもなんも書くこと無いだろう？

私：いや、なんか昔のこととか話してくれればいいんだよ。あんまり、聞いたことがないと思ったからさ。お前っていつも明るいけど、なんで？

彼：いや、なんでって聞かれても普通じゃないか？いつも暗くしている理由もないじゃん。

私：それもそうだけど、嫌なこととかあると少しは暗くなったりするじゃん。

彼：確かにそうだよ。だけど、自分が暗くなっているせいでみんなの雰囲気が悪くなるのは嫌だし、友達と話してると楽しいからね。

私：昔からそんなんけ？

彼：多分変わらないと思うよ？いつも自分分析しているわけじゃないからわからないけどね。

私：なんかお前すごいな。悩みとかないわけ？

彼：悩みがないわけがないだろう。自分は人からどう思われているのかとかもかなり気になるしな。あとは、強いて挙げるなら悩みとかじゃないけど、お前とか阿蘇って普通に女子と喋るけど、なんでなの？って思うしね。

私：俺は吹奏楽部やでじゃない？でも、お前もかなり普通に喋ってるが。

彼：なれると普通にしゃべれるけど、初めてやと結構緊張する。高校の時とかテニス部の人以外あんまり喋る機会なかったから慣れてないもん。

彼はこのときいつもとは違い、下を向きながらもじもじしながらはなしてくれた。

私：そうなん？お前は昔から今みたいな感じやと思ってた。普通に男女関係なくいろんな人から相談受けてるで、慣れてないとか思えんもん。確かに、口数は減ってるけど。

彼：ちげーよ！慣れるまで結構無理してる時とかあるしね。っていうか、お前とかみんなどう思ってるか知らないけど、俺くちべただよ？さっき昔のこと喋らないって言ったけど、喋らないんじゃないくて喋れないんだよ？

私：そうなん？なんか意外やな。今までそんな風に見せんかったでわからなかったし。お前もなかなか無理してるんやな。

彼：無理をしてるとか自分ではそういう風に思っていないけど、くちべたっていうのは嫌だから、いろんな人と喋るようにはしているけどね。

私：なら、さっきいった明るく喋ってるのが普通ってのちがくね？普通っていうより心がけていることやげ。

彼：いや、ちげーよ！しゃべり始めると明るく喋るっていうのは普通のことだけど、それ以前の喋りかけるっていう段階でいろんな人に話しかけるのを心掛けてるってことだから。

私：へー。なんか自分の欠点をどうにか克服しようとしてるってやっぱすごいと思うよ。彼が興奮して少し声を荒げて喋るということはあまりなかったのだから、私は正直驚いた。しかし、感情の起伏の激しい私と似ているなどこのとき感じた

ここで雑談をした後、次の質問をすることにしました。

私：そういえばお前って結構運動神経いいがの。

彼：いや、ずっとテニスしてるである程度の基本的なことは出来るけど、がっつり出来るのはやっぱりテニスだけだぞ？

私：でも、俺からしたらかなりいろんなやつ出来てる風に見えるけどの～。

彼：そういう風に見えるならラッキーやな。

私：でも、テニスできとうにしてたらそういう風にも見えんやろ？

彼：テニスは真面目にやってたから！地味トレとかも嫌いだけどそれなりにちゃんとやってきたしな。

私：なかなか頑張ってるな。

彼：好きなことだから。体動かさないとなんか気持ち悪いし。

私：しかもお前頭いいよな。

彼：頭いいっていうか、わかからんとこあると悔しくない？俺、それが嫌やで中学・高校でもそれなりに頑張ってきてるで！

私：そういうのはわかるけど、わからんもんはわからんくない？

彼：そこで諦めるなや。ちょっとは俺をみならえー。俺なんて今でもわからんやつあるの嫌だから今でもわかるまでやるし！参考書見ればわかるやつもあるのだから、もっとやれや！

私：大学来てまではもういいかな。ってか参考書とか高いしみたく見ると頭痛くなるでみなくていいかな。

彼：ちゃんとやれや！一番になりたいとか思わんの？誰かに負けるとかくやし過ぎるから。

私：お前かなり負けず嫌いやな。

彼：わり一かよ。勉強で人に負けるとか嫌だから。

私：でも、お前勉強だけじゃなくてニュースとかみていろいろ勉強してね？

彼：それは勉強してるわけじゃなくて、ニュースとか見るのが好きなだけ。今、何が起きてるとか気になるげ。お前ももっとニュースみろよ！

私：ニュースとか見てもつまらんげ。芸能関係とかなら面白いけど、政治とかどうでもいいから。

彼：政治経済とかも知っとくと将来的にも役立つだろうが。

私：そんなん考えてるの俺らのとしやお前くらいじゃないの？もっとほかの人と一緒に気楽にいければいいんじゃない？

彼：他の人と一緒にする必要はないじゃん。俺は自分のやり方でやっていくから。

それから山田さんは将来のことなどをいろいろ話してくれました。私はこのとき彼は将来設計もしっかりできている人なんだとおもいました。

5. まとめ

私はまず、はじめに山田さんがなぜいつも明るいのかということを知ろうと思いました。話をしていくうちに、彼にとって明るく話すということとはごく自然のことであるということが分かりました。しかし、その裏にも自分の欠点を克服しようとしていることが知れてよかったです。また、前半の質問をしている時の山田さんは途中で沈黙をしたり、感情が激しくなったりと、いつもみんなの前で見せているのとは違った素の山田さんとは違った一面も見ることができました。

二つ目の質問でわかったのは彼はかなりの負けず嫌いであるということです。しかし、負けず嫌いだからこそなんにでも一生懸命にできるのだと思いました。また、自分たちの年齢で将来設計がしっかり出来ていて、先のことをみすえて行動ができるというのはとてもすごいことであると思いました。そんな山田さんだからこそ頭もキレるのであり、みんなの先頭にたって物事が行えるのだらうと思いました。

このインタビューをする前私は、山田さんは人間として素晴らしい人だと思っていた反面、どこか近寄りがたい部分もあると思っていました。しかし、山田さんはとても人間味のある人で自分たちと変わらない人なんだと思いました。また、感情の起伏の激しい私ともどこか似ている部分もあるのではないだろうかということも感じました。このことで、親近感がわくと共に山田さん人間としての面白さがより一層深まりました。私は最近、他の友達以上に山田さんと一緒にいることが多いです。それが今回のインタビューでただのよい友達という気持ちから何かわからないけどさらに良い友達とかんじることができました。

6. 授業を終えて

今回の授業で友達にインタビューをするというのは正直恥ずかしい気持ちとともに「めんどくさい」という気持ちがありました。しかし、このインタビューをすることによって、親しい友達の知らなかった部分を知ることができたし、より一層友達の魅力にふれることが出来たというのはとてもよかったです。また、違う学部学科や留学生とも交流することができとても貴重な体験だったと思います。